

Title	安南史研究上の二資料 : Bibliographie annamiteと大南寔録
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.111- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安南史研究上の二資料

— Bibliographie annamite と大南寔録 —

松 本 信 廣

昨年度に於て安南史學の爲に悦ぶべき二資料が、一つは極東學院關係者の好意に依り我國に初めて齎され、一つは同じく同所員に依り同學院雜誌中に發表された。即ち前者は安南越南宮廷史館の版行にかゝる「大南寔録」であり、後者はエミル・ガスバルドン氏編述にかゝる *Bibliographie annamite* である。此處に後者の簡単な紹介及び前者の將來の次第を述べて同學諸君の参考に供したいと思ふ。もとより學問的研究や批評ではなく、單なる解説に過ぎぬことは前以てお斷りして置く。

(一) *Bibliographie annamite*

安南の文籍に對し書目の乏しいことは從來も度々述べた所であつたが、此度佛國極東學院の所員エミル・ガスバルドン *Emile Gaspardone* 氏に依つて標記の論文が論述せられ、同學院雜誌 *Bulletin de l'Ecole Française d'Extreme-Orient*. t. XXXIV に發表せられた。之は安南書誌學に對し吾人の抱いてゐた永年の渴望を醫してくれたところのものであり、同氏の眞摯な努力に對し、心から感謝の念に堪へぬ。氏は先に我日本の書目のピブリオグ

ラフイー Les bibliographies japonaises を日佛會館
學報、佛文編、第四卷——四號 Bulletin de la Maison
Franco-Japonaise, Serie française, Tome IV, Nos
1—4, Tokyo, 1933 に發表し、多大の裨益を日本
研究の爲に齎された人であり、今また書目の極め
て乏しかつた安南書誌學の上に前人未踏の境地を
開拓せられた功績は東洋の文獻學史上に永久に銘
記せらるべきものがある。

一體安南の漢文文籍に對する書目として吾人の
知れるものは僅かに黎貴惇の大越通史の藝文志、
同じく同人の著述「見聞小錄」中の篇章篇と、潘
輝注の歷朝憲章類誌の文籍志あるのみである。著
者は大體黎貴惇の藝文志を土臺とし、之を佛譯し、
潘輝注の文籍志から必要に應じて摘録増補してを
る。一體兩書ともごく簡單な解題で作者の生地、
年代等に對し全く沈黙を守れるに對し、ガスパル
ドン氏は極力文獻を抄獵して一々著者の生卒年

代、その傳記等を調べあげ、詳細な註を附し、ペリ
オ氏、カディエール師共著の Première étude sur les
sources de l'histoire d'Annam 以來殆ど手のつけら
れなかつた安南書誌學に始めて確實な手引きを與
へて呉れたのである。かういふ努力は一見容易な
るが如くして實は甚だ困難である。例へば安南に
は未だ完全な人名辭書なく、作者の傳記を知る爲
種々なる文獻を搜索しなければならぬ。ガスパル
ドン氏はその爲に大越史記全書を初めとして安南
志略、越史略、安南志原、越嶠書、越史通鑑綱目、
阮侗の登科錄、潘輝溫の登科錄備考、また國朝登
科錄、地方の郷科錄、家譜、黎朝鄉選、會試文選、
郷試文選、詠史、大越通史の列傳、見聞小錄、潘
輝注の歷朝憲章類誌の人物誌、人物姓氏考、寔錄
の列傳、撫邊雜錄の列傳、嘉定城通志、大南一統
志、その他の地方志、裴壁の皇越詩選、黎貴惇の
全越詩錄、阮傲の越詩續篇等の數多の資料を檢索

したのであつて、之を見ても本書の記述が如何に
信憑すべき材料に依つて正確な典據の上にたつて
あるかと推察出来よう。本篇は單に書目解題の書
たるのみならず、一面安南最初の人名辭書たる觀
あるものであつて、今後の研究者を裨益するところ
極めて大なるものがある。

書物の分類としては、黎貴惇は初め一、憲章、
二、詩文、三、傳記、四、方技の四部門に分ち、百
十三種の書籍を登録し、潘輝注は續いて一、憲章、
二、經史、三、詩文、四、傳記に分ち、二百七種の書
目を舉げた。ガスバルドン氏は大體之に準據し、
少しの訂正を加へ、1. Gouvernement, 2. histoire,
3. littérature, 4. legendes, confuceisme, bouddhisme,
traites divers. の四部分に分ち、百五十四種の書籍
を解題してをる。前二書の採録した書物は黎朝末
までに編述されたものであり、従つて著者の取扱
つた解題は十九世紀初頭までの述作に止まつてを

安南史研究上の二資料(松本)

るが、著者の考證の精密なる註の中に多くの阮朝
の文籍に敘述し従つて下限は現代に迄及んでを
る。然し乍ら安南書は分量頗る多く、極東學院所
藏本の數から云つてもガ氏の採録はその一部分に
過ぎぬ。氏は序文に依るともつと廣汎な安南書目
を編述する企圖を有せられたのであるが、或る事
情からこれ丈けを先づ分割して發表されたのであ
るといふ。極東學院の囑託、陳文理氏の「太古より
十三世紀までに至る安南佛教」Tran-Van-Giáp, Le
bouddhisme en Annam, des origines au X III^e siècle
(B. E. F. E. O., XXXII, p. 192. Note 1)に依る
と陳文理氏は Les chapitres bibliographiques de Le-
qui-Dôn et de Phan-huy-Chú「黎貴惇と潘輝注の書
誌篇」と云ふ論文を起草中であると云つてをる。
してみるとガスバルドン氏の或る事情といふのは
此の競争的な陳氏の研究の表はれない中に先づ此
の部分丈けを發表して先を越されたものと見られ

よう。然し吾人はガ氏が將來進んで阮朝の書籍を主體としたより廣範圍の書目を編述され、完全なる安南書録を大成せられんことを切に祈つてやまない。

序文に次いで著者は先づ黎貴惇の傳記を述べ(一八一—二四頁)、次にその作物に就て語り(二五—二九頁)、續いて潘輝注の傳(二九—三一頁)及びその著作に就て(三一—三三頁)敘してをる。黎貴惇は申すまでもなく、黎朝景興年間に活躍した政治家であり、同時に學者として盛名を馳せ、安南の王安石と呼ばれた人で、多くの著作を残してをる。また潘輝注は阮朝明命帝の朝に仕へた人、その著作歴朝憲章類誌は安南唯一の百科全書的書物として著名である。著者は次いで各書に就て綿密な註記を爲し、各書の傳來、異本の比較、内容の略述等微に入り細を穿ち、その一つ一つを切り離せば優に一論文を成す價值ある詳細な考察を爲し

てをる。例へば歴史の部門に於て大越史記の條の如きは堂々二六頁に亙り、安南各朝の編史事業の歴史にも敘及し、最後の脚註に阮朝の寔録の第六紀の記述にまで及んでをる。此の一項は安南史研究者にとつてまことに必讀の記文といふべきである。

讀過の際氣付いたことを左に述べれば、著者はその註記部分を小文字で印刷してをるけれども、一體本論文の中主體を成すのは寧ろ氏の註記であり、その部分が小文字であるのは誠に讀み辛くて残念である。著者の謙遜かも知れぬが、之は今少し大きな活字で印刷して頂きたかつた。また八十年の明良錦繡の詩集に解題して黎聖宗が洪徳元年(一四七一)チャンバ征討の際御製を讀まれた海門の數を十三とされてをるが、自分の持つてをる寫本に依ると海門の數は十四となり、乾海門の代りに瀚海門を擧げ、朝宗一派滔々云々といふ詩を

載せ、その次に朝海門を入れ、それから丹畦海門となつてをる。自分の本は後に珠璣勝賞詩集（十三枚）を添へ、全部で紙數三十八枚の寫本である。表題は明良錦繡詩集となり、聖宗の占城進征を辛卯二年正月初一日と爲し、同一月詔班師とある。これは大越史記全書及びガ氏所引のものと違つてをるが、自分の方が恐らく寫字者の誤りであらう。

また九九番の白雲庵集に對し十卷本の外に黎貴惇は著者の名の無い序文をつけぬ前者の十分の一位の詩しか含まぬ一卷本のあることを述べてをるが、自分の持つてをるものは恐らく之に該當するものではないかと考へられるもので、最初の一枚と二枚の表に阮兼謙が莫朝乙未（一五三五）科會試に際しての第一甲たりし經綸天下大經賦を載せ、二枚の裏に吏部尙書詠詩、及び二枚より三枚の裏表にかけ程國公謝緩兵敗を記し、それから四枚目より白雲庵寓興二首以下二百五十有餘首の詩

を録してをり、序文も著者名もない紙數八十四枚の一冊本である。六五番の抑齋詩集も、予の所藏寫本は初めに陳克儉の抑齋詩集序、次に黎貴惇の全越詩集序、次に抑齋先生行狀考を載せ、阮能靜の序（一八三三）、吳世榮の序（一八三七）を記し、抑齋遺集の名の本に卷一、詩、卷二、文類軍中辭令、卷三、文類、卷四、文類輿地志、それに次いで諸家評論、抑齋先生外傳、文類を附し、最後に卷五としてその父阮飛卿の詩文を集めた二冊本である。

また一二九番公余捷記の註に、拙作「老獺稚傳説の安南異傳」に敍及されてをるが、その中に *legende mongole* とされてをるのは *legende coréenne* にして頂きたかつた。

以上述べたことはごく枝葉の問題で本書の本質に毫も觸れるものでない。要するに本書は安南書研究の上に準據となるべき好資料であり、自分の

紹介は此の勞作のごく片鱗に觸れたに過ぎず、讀者は親しく本書に接してその如何に利用價值多き重要な文獻であるかを知つて頂きたい。

(二) 大南寔錄

大南寔錄の存在を自分が初めて知つたのは、巴里滞在中アンリ・マスペロ氏を御訪ねした時に得た氏の教示に依る。氏は安南宮廷が辭を左右にして容易に同書の版行を許可せず、フランスの學者には同書を手に入れることは難かしいが、日本の大學に對してはひよつとすると許可されるかも知れぬといふことを話された。其後昭和八年予の望月資金に依る印度支那旅行に出發の際外務省の前河内總領事永田安吉氏を訪問し、安南書採訪の苦心談を伺つたところ、氏は大南寔錄の版木が順化宮廷に存し、宮廷の許可を得れば印行が可能であるが、然し價が大變高いといふお話であつた。そ

こで予は是非同書を日本に將來したいといふ考から出發前に東洋文庫の白鳥博士や石田幹之助氏等に御盡力を依頼し、河内に着くと早速日本總領事館の書記なる阮氏や黎愼氏に依頼し、大南寔錄再印刷の件を同氏等の安南友人を通じて順化王室に交渉を依頼した。然しその話はなかなか涉らず、予の一ヶ月半ばかりの短い滞在中に於ては容易に効果があがりさうもなかつた。丁度その時友人ガスパルドン氏もカディエル師を介して大南寔錄を二部再印刷中であつた。折柄カディエル師が河内に見えてゐられたので、予は師を滞在中のカトリックのミッションに訪ね、該本の再印刷について盡力を依頼した。師はフランス人らしい社交上手な人で愛想よく予を迎へ、丁度その時安南宮廷學部尙書の秘書である Ho-Dac-Hang なる人が今國家試験の委員として河内に滞在中であるから同氏に依頼せよと云はれ、安南人の從僕をして同氏滞留

中の支那ホテルにまで案内せしめられた。ホダクハムといふ人は、少し無愛想な態度の人物で、「歸つてから學部尙書に話し、その返事はカディエル師に傳へる」と云ふ挨拶であつた。これでは甚だたよりないので、其後予は順化に向ひ小旅行を爲した際、順化の Resident Supérieur なる佛人チボ氏に依頼し、學部尙書范瓊 Pham-Quynh 氏に紹介してもらひ、直接「寔録」の再印刷を交渉して見た。同氏は本誌前々號に述べた様に若々しい人物で愛想よく予の請に答へ、大南寔録の再印刷に異存はないが、最近二部刷つたばかりであり、此の次に數部纏めて印刷する場合求めに應じようといふ挨拶であつた。

これで問題は結局予の滞在中には解決しさうもなかつたので遂に歸國し、日本に於て更に東洋文庫の白鳥博士や岩井大慧氏などの御援助に依り文庫の爲是非一部購求することとして頂き、河内極

安南史研究上の二資料(松本)

東學院のガスバルドン氏にその再印刷に對する援助を懇請することにした。氏は快く之を承諾され、矢張りカディエル師にいろ／＼仲介を依頼され、わざ／＼此の爲に師の任地コントゥムを尋ねたり、また順化に旅行され、范瓊氏にも逢はれたやうであつたが、學部尙書ホダクハム氏の辭職からカディエル師の仲介は效力がなくなつたとかで、遂に極東學院々長セデス氏の公文の交渉となり、之に依つて漸く安南宮廷で再印刷を承諾することとなつた。これより先どうせ印刷するならば少數を多くといふ考へでガスバルドン氏より日本にて必要とする部數を問ひ合されたので、東洋文庫以外なほ五部を再印刷してもらふこととした。無論日本では此の外寔録を必要とする大學や研究所は澤山あるが、印刷と共に不鮮明な箇所を書き足す勞作を伴ふので、餘り多くの部數を要求するのは先方にも迷惑をかける惧があるので、所定數を

六部と限ることにした。その爲各地諸大學の御依頼に應ずることが出来なくなつた事は誠に申譯ないが、事情御諒察の上御宥恕を請ひたい。

さて順化で印刷を終了した大南寔録は河内の學院に送付され、同所にて荷造りの上海防で大阪商船スラバヤ丸に乗せられ、昭和十年十一月二十日頃横濱に到着し、廿六日本塾圖書館に送り届けられ、開函の上東洋文庫、東京帝大、京都帝大、東方文化學院東京及び京都研究所の各圖書館に分配された。大南寔録の日本輸入までの経緯は大體以上の如くであり、そのために極東學院所員エミル・ガスバルドン氏及び院長セデス氏の並々ならぬ御盡力に興つた事は我學界の衷心より感謝に堪へぬところであり、同二氏の好意は日佛外交史上永久に銘記すべきものがある。また我國に於ては白鳥、岩井、加藤(繁)、小島諸先生その他各圖書館當事者の深き御配慮に興つたことを厚く感謝す

る。

さて、斯くして我國に到來した大南寔録は、冊數百三十九冊、横六寸五分縦一尺二分の大本であり、紙は薄い安南製の安つばい質のもので、その豪華さは到底支那や朝鮮のそれに對抗することは出来ぬ。然し乍ら一々各部分に就て見ると、阮朝の勢盛んであつた時と衰微時代との間に文字の大小などからして自ら異同あり、點檢してゆくと興味津々たるものがある。此處に簡単な豫備的解題をして同學の士の参考としよう。大南寔録に關する敘述は既にペリオ教授とカディエル師との合著 *Première étude sur les sources de l'histoire d'Annam (抜題本)* p. 6, 21—23, 33 にも見えてをる。寔録の編纂は安南各朝に於て行はれ、ガスバルドン氏の前引書の五五頁に依ると陳朝に存した證據は陳英宗の事を書いた大越史記全書(卷六)や大越史記前編の記事を以て知られてをる。黎朝に於ても修

史事業は依然盛んで、殊に支那などに於て類を見ない王朝の亡びない中に該王朝の編年史を含めた大越史記全書が、宮廷から刊行されるといふ除外例が行はれてをり、これは鄭氏の専權に依り黎王宮が既に虚器を有するのみに過ぎなかつた爲だと云はれてをる（ペリオ、カディエル前引書十六頁）。阮朝に至つて先づ初代の嘉隆帝の治世に於ては皇越一統輿地志、皇越律例等の編纂を見た。一體嘉隆帝は學事にも理解を有した帝王で、歴史を好み通鑑綱目などの史書を好んで讀まれたが（正編一、十五卷三枚裏、四十三卷十六枚表）嘉隆十年には國朝寔録を修することを議し、侍中學士范適、山南上督學阮瑋、懷德督學陳瓚等を京に來らしめ、史局編修に充てしめ（同四十二卷十九枚表）、詔して故典を求めさせ、また廣平以南の諸營鎮に詔して癸己（一七七三）より壬戌（一八〇二）に至る間の民間の史書を蒐め、また故老の言を採録せしめて

安南史研究上の二資料（松本）

參考としてをる。また黎史を修せんことも議し、北城鎮に詔して黎朝及び西山時代の事迹を記した書を獻せしめてをり、同十二年に設けられた北城書寫司は東京河内舊藏の祕書を謄寫することを目的とし、恐らく史局の史書採訪に役立つ所多大なものがあつたであらうと思はれる（同四十六卷四枚表）。然し嘉隆帝一代に於ては未だ完全な史書公刊までには至らなかつた。次の明命帝は嘉隆帝の第四子で、即位十二年（一七九一）に誕生してをる。嘉隆十八年（一八一九）に帝位を襲ひ、同元年六月に國史寔録を纂修することを諭し、京城内の左に地を卜して國史館を建てしめた（正編二紀卷三、十二枚裏）。同年十一月史局の官制を定むることを議し（同卷六、七枚裏、八枚表）、翌年三月帝は國史館に幸し、正中に御座を設け、門前に傾蓋下馬牌を立て、左右堂を建つることを命じられてをる（同卷八卷、十二枚表）。斯くて同五月官制を發布

し、列聖寔録の編修を開始した(同卷九、一枚裏、二枚表)。そして更に十四年にまた寔録纂輯の命を重ねてをる。斯くして編纂された寔録の中嘉隆帝以前のものは前編と呼ばれ、嘉隆帝以後は正編と呼ばれ、阮文仁、鄭懷徳、范登興等の諸臣が事に當つた。

阮文仁は安江永安の人、甲午の初(一七七四)西山の賊の侵入の際勤王の師の徵募に應じ、睿宗の軍に従ひ轉戦し、丁酉(一七七七)の敗北後嘉隆帝の軍に従ひ連戦功あり、後病んで鎮邊留守となり、年五十にして學に志し、經史を涉獵し、嘉隆帝の歸仁を征するや嘉定の留守を守り、民政に勤め、よく兵餉を調へ、大功あり、天下統一後(一八〇二)嘉隆帝に上言して庶政を調へ、學事を興すことを以てし、帝の嘉納するところとなつた。後七年(一八〇八)嘉定の總鎮となり、よくシアムのカンボチア侵入を防いで功あり、明命帝の二年に至

り(一八二二)史館總裁に當てられ、翌年春(一八二二)年七十で卒してをる。

鄭懷徳は字を止山、號を長齊と云ひ、その先は福建の人、清初安南に逃げ、父慶は世宗の朝に仕へた。懷徳は幼くして學を好み戊申(一七八八)擧に應じ、東宮侍講、戸部右參知、戸部尙書に歴任し、一八〇二年清に使し、歸來嘉定の協總鎮、禮部尙書兼管欽天監事務、吏部尙書等に任じ、明命帝二年(一八二二)史館副總裁となり、次いで協辦大學士領吏部尙書兼領兵部尙書を授けられた。此の年駕に従つて北巡し、還て歴代紀元、康濟錄二部の書を進め、五年(一八二四)欽修玉譜總裁に充られ、次いで商船事務を兼領し、六年(一八二五)春年六十一で卒した。

范登興は字を契矩と云ひ、嘉定新和の人で、父を登龍と云ひ學識あり、家居してよく人に教へた。登興も幼にして學を好み、廣く群書に通じ、丙辰

(二七九六)登第して嘉隆帝に仕へ、吏部參知となり、掌長舵事を兼ね、十二年(一八一三)禮部尙書に陞り、十五年(一八一六)欽天監事務を兼管し、明命二年(一八一二)年國史館副總裁となつたが、翌年禮部に不正あり、一時解職せられ間もなく復職して一八二三年吏部左參知となり、翰林院を兼管し本の如く國史館副總裁となり、玉譜を修し、五年に禮部尙書となり、六年(一八二五)六十一を以て卒した。病中も寔録のことを憂へ、かねて起草した嘉隆帝の戊申(一七八八)より辛酉(一八〇一)に至る十四年間の事蹟を調べた草本を史館に獻じ、史館は之を祕藏して利用しなかつたが、嗣德二年に至り初めて之を検出してその熱誠に感じたといふ。

三代目紹治帝の元年に至り、また史局を開き、張登桂、武春謹、何維藩、阮忠懋、杜光、蘇珍、范鴻儀、武范啓等に命じ、寔録前編正編を修し、

安南史研究上の二資料(松本)

また之に次いで明命帝の寔録を編纂せしめた。そして紹治四年三月六日に至り先づ大南寔録前編が成り、版行の許可を奏請してをる。

張登桂は字を延芳と呼び、號を端齊又は廣溪と呼び、廣義美溪の人、嘉隆十八年に登第し、學識を以て聞え、明命年間、皇予直學、侍讀に充てられ、戸部參知、兵部尙書、協辦大學士、機密院大臣等に任じ、功勞あり、二十年綏盛男に晉封され、紹治元年文明殿大學士となり、國史館總裁に任じ、六年伯爵に晉封され、顧命良臣の玉牌を賜はり、紹治文規を欽修し、嗣德元年勤政殿大學士に擢でられ、郡公に晉封され、年七十を以て致仕し、嗣德十八年年七十二を以て卒してをる。その著書に廣溪詩集、廣溪文集、日本見聞錄等がある。

武春謹は廣平麗水の人、少にして學に努め、嘉隆帝の順化恢復の際貢士を以て軍門に謁し、元年翰林院に補せられ、それより明命朝に於て工部尙

書、平富總督、協辦大學士にす、み、二十年刑部
尙書となり、兼ねて都察院を管し、寔録總裁に充
てられ、平定の均田の事を行ひ、紹治元年東閣大
學士となり、嗣德五年致任し、八十一を以て卒し
た。

何維藩は字を德寧と云ひ、清化弘化の人、嘉隆
十八年に郷薦となり、明命朝に仕へ、刑部右侍郎、
都察院左副都御史等に歴任し、十四年寔録前編の
纂修となり、す、んで吏部右參知となり、後工部
尙書にす、み、紹治元年更に協辦大學士を加え、
山陵、宮殿の造營に功あり、機密院大臣に充てら
れ、二年國史館副總裁を兼ね、大南會典を總彙し、
嗣五年太子少保を加え、六十二を以て卒した。

阮忠懋は淡軒と號し、又安東城の人、嘉隆六年
郷貢、弘化知縣となり、明命中、平定督學より戶
部尙書兼通政司に進み、次いで工部尙書となり、
機密院大臣に充てられ、紹治元年禮部尙書となり、

年六十二を以て卒してをる。

杜光は字を暉吉といひ、海陽嘉祿の人、明命十
年進士となり、翰林院編修より工部中廣治按察使
を歴任し、紹治の初め翰林院直學士充史館纂修と
なり、嗣德十三年嘉定巡撫となり、佛軍と戦ひ後
東京に派遣せられ十九年六十歳を以て卒した。

蘇珍は北寧文江の人、明命七年進士となり、翰
林院編修に任せられ、紹治二年太僕寺卿となり、
史館纂修に充てられ、嗣德元年禮部參知に進めら
れ、故の如く史職を領し、七十を以て致事し、間
もなく卒した。

武范啓は字を東陽と云ひ、寧平安謨の人、明命十
二年郷薦を領し、瓊溜知縣より禮科給事中に上り、
紹治の初刑部辦理となり、次いで鴻臚寺卿に移り
史館纂修に充てられ、寔録前編を修してをる。丁
未(一七八七)以前は阮朝祖先の事蹟まことに乏し
く、戊申(一七八八)より辛酉(一八〇一)間は舊草

が存し、載事甚だ難しいので、啓は同館の者と次第を搜輯してその緒につくを得た。また紹治帝の御製詩の註解を爲したり、その詩文の編纂を爲し、君寵を恣にしたが、嗣徳帝の初め事あつて左遷せられ、後また召されて侍讀學士兼史館纂修となり、帝の詩文の顧問となり、その親任厚かつたが、二十三年權辦太原布政使として討匪中匪賊の獲る所となり、賊魁を説いて官軍に降らしめ、京に回つたが間もなく卒してをる。

さて此等の人々に依つて纂修された寔録前編はその包含する時代は十六世紀後半より十八世紀後半に及び、丁度御朱印船が頻繁に廣南地方を訪れて、日本町の建設せられた時であり、吾人にとつて著しく興味ある時代である。然し乍ら西山の亂を經、此の時代に對する史料の殘存するもの極めて少かりしと見え、殘念乍ら僅か十二卷(三冊)の略史に過ぎぬのは致し方ない。

安南史研究上の二資料(松本)

一體此の時代に對して大越史記全書中最後の本紀續編追加は嘉宗帝の徳元二年(一六七五)清の康熙十四年を以て終つてをり、それより後熙宗、裕宗、永慶帝、純宗、懿宗、顯宗、昭統帝に至る間に對して教ふるところはない。ガスバルドン氏の研究に依ると、大越史記全書の西山版(一八〇〇)は黎朝の終りまで記すつもりであつたらしいが、未完成で終り、寫本として残つてをる大越史記續編が一七八六年顯宗の末年までを増補し、高朗の歷朝雜記が昭統三年一七八九年まで記してをるに止まり、刊本としては阮朝の欽定越史通鑑綱目を參考としなければならぬ。通鑑綱目は嗣徳八年嗣徳帝が潘清簡等の史臣に命じて編纂せしめ、建福元年(一八八四)に印刷された最も大部な安南史であつて、黎朝の滅亡昭統三年一七八九年までを記し、首尾を完からしめてをる。斯様に材料の極めて少い十七、八世紀に對して大南寔録前編が

(三)

一三三

假令寡少とは云へ如何に重要な參考資料であるか
と判るであらう。

此の間北の東京には黎王統を戴いた鄭氏が政權
を握り、安南は二分してゐたので南の阮氏は西人
が所謂 *Seigneur de Cochinchine* と呼べるものであ
り、事實上獨立王國の觀があつた。第一代の阮潢
は黎朝の功臣阮淦の子で、阮淦は阮朝の史家によ
り肇祖靖皇帝と呼ばれる人であり、莫登庸のため
黎氏の亡ぼされるや昭宗の子寧を奉じて莫氏に抗
し、清化又安を奪ひ、一五四五年陣中に歿し、そ
の後婿の鄭檢が兵を率ゐて莫氏を撃破し、勢大い
に振つたが、淦の子潢は鄭氏の鋭鋒を避けて南の
順化に鎮し、鄭檢に次いだ鄭松河内を恢復するに
及んで一旦入觀したが、滞在八年にしてまた順化
に歸り、鄭氏と相對持し、孰れも黎氏の主權を擁
護することを名として争ひ始めたのである。慶長
寛永の頃我朱印船は東京及び廣南に來り、鄭氏及

び阮氏と貿易を爲したが、當時抗争せる二氏は互
ひに日本貿易を獨占せんとしてゐた。しかし大南
寔錄前編中日本に關する記事はごく僅少であり、
左の二項目を見出だすに過ぎぬ。

即ち卷二、三枚裏四枚表に丁巳四年「一六一七
(元和三年)」春正月初置圖家、收貯貨項以內、令
史司領之の註中に、順廣二處惟無銅礦、每福建廣
東及日本諸商船有載紅銅來商者、宮爲收買每百斤
給價四五十緡とあり、

また卷五、二十二枚に

己未三十一年「一六七九(延寶七年)」春正月、故
明將龍門總兵楊彥迪副將黃進高雷廉總兵陳上川副
將陳安平率兵三千餘人戰船五十餘艘、投思容沱漫
海口、自陳以明國通臣義不事清、故來願爲臣僕、時
議以彼異俗殊音猝難任使而窮逼來歸不忍拒絕、真
臘國東浦嘉定古別名地方沃野千里、朝廷未暇經理、不
如因彼之力使關地以居、一舉而三得也、上從之、

乃命宴勞嘉獎仍各授以官職、命往東浦居之、又告諭眞臘以示無外之意、彥迪等詣闕謝恩而行、彥迪董進兵船駛往雷嵐今屬嘉定海口、駐札于美湫、今屬上定祥川安平兵船駛住芹蔭海口、駐札于盤麟、今屬邊和關間地構舖舍、清人及西洋日本閩婆諸國商船湊集、由是漢風漸漬于東浦矣、とある。

紹治元年列聖寔錄を修すると共に併せて當時活躍した人物の列傳を修輯する事となり、張登桂、何維藩、林維義、蘇珍、范有儀、阮有做、范伯迢、陳著、斐積の史臣が諸地方を旅行して事蹟を調べ、寔錄を參稽し、傳聞を博採し大南列傳前編を編述した。嗣德五年（一八五二）三月二十九日にその成るを奏し、直ちに印刻に附せられてをる。内容は后妃傳、皇子傳、公主傳、諸臣傳、隱逸傳、高僧傳、逆臣姦臣傳の七目に分け、六卷（二冊）から成つてをる。署名者の中林維義は平定明郷の人、總督尙書協辦大學士輔政機密大臣と歴任し、嗣德壬

戌、嘉定に往いてフランスと商議し、その結果が、宮廷に悦ばれずして官爵を奪はれてをる。

范有儀は字を仲羽、澹齋先生と號し、その先は父安より廣南の延福に遷れるもの、幼より神童の聞えあり、明命二年郷薦を領し、行人、知府、侍講、按察使より光祿寺卿となり史館纂修に充てられ、嗣德の初その詩才が帝に認められて禮部右參知を授けられ、經筵日講官に充てられ、七年奏請して大南文苑を編し、七十六卷一千四百二十一首を作り、十五年老病を以て引退し、三月年六十六を以て卒した。著に使燕叢詠、澹齋詩集がある。

范伯迢は北寧武江の人であり、明命十三年進士となり、翰林院編修、思義府知府より戸部員外郎、兵部司主事になり、明命政要を修したが、十九年山西督學となり、紹治年間は寧平父安二省按察使となり、嗣德元年太僕寺卿に擢でられ、史館纂修に充てられ、八年事を致し、家に歸つて學を講じ、

多くの門人を出だし六十四を以て卒した。

斐積は字を友竹と呼び、興安僊侶の人であり、明命十年進士となり、嗣徳元年禮部右參知となり清に使い、歸つて都察院左副都御史となり、大越史記を校正し、大南一統志を修し、大南風雅統編を集せんことを奏請し、容れられる所多かつた。後事を以て左遷せられ、史館纂修となり、後また進んで光臚寺卿、翰林院直學士、吏部左參知となり、史職を依然司り、十二年巡撫護理平富總督となり、十四年卒した。著に燕臺嬰話がある。

嘉隆帝の寔録たる大南寔録正編第一紀の方は、紹治七年に至り二十七年の歲月を費して成を告げ、嗣徳元年二月二十一日に印刷を奏請した。その史臣の名として前編のそれより阮忠懋、范鴻儀、武范啓が減り、范有儀、陳著が加はつてをる。卷數は六十卷で十五冊に分たれてをる。本書の中には嘉隆帝が西山の亂の爲に追はれ、崑崙島やシア

ムに逃れ、またビニョー師と會見し、その太子景をフランスに派した經緯や、嘉定を恢復し、歸仁を奪ひ、遂に天下を統一した事蹟、及び即位後の治績を詳述し、十八年十二月の崩御に終つてをる。

大南列傳前編が出来た時之に續いて嘉隆帝時代の列傳を修することとなり、史館は后妃傳、皇子傳、公主傳、諸臣傳、行儀傳、列女傳、僭竊傳、外國傳の八目に分たれた大南列傳正編初集三十三卷(八冊)を編述した。然し繁務の爲刊行に及ばなかつたところ、成泰元年十月十三日に至り史館の人々の希望に依り、印行に附せられる事となつた。その奏請した史臣の名として阮仲合、斐殷年、張光愼、段文評、黃有秤、成玉蘊、鄭光炤、蘇珠等が挙げられてをる。

右の中阮仲合は金江又は桔坪と號し、嗣徳十二年二十五を以て卿薦を領し、十八年進士となり、承天府尹として政聲あり、二十八年フランス。

ガルニエの事を東京に起すや、河内巡撫として往いて之と商議し、ガルニエ歿後よく南定護理定安總督として東京諸地方を綏撫して功あつた。後吏部尙書となり三十六年佛の順化を攻むるやその講和の衝に當り、後東京に派せられて秩序恢復に努めてをる。同慶二年京に歸り、また吏部尙書を領し、機密院大臣國史館總裁となり、成泰帝の御代に文明殿大學士に進み、成泰六年（一八五二）パリに使い、九年（一八九七）致事し、壬寅（一九〇二）夏六十九を以て卒した功臣である。

張光愼は張登桂の子であり、太子小傅東閣大學士に陞り、輔政府機密院大臣となり、後年老いて史館總裁經筵講官となり、國子監を管理し六十九歳を以て致仕した。また段文評は廣田賀郎の人、紹治六年登科し、成泰五年には協佐大學士、吏部尙書であり、太子少保を加へ、機密院大臣に充てられてをる。黃有秤は廣治登昌碧溪の人、嗣德五

年登科し、成泰五年官參知、尙書銜を加へ、史館纂修、經筵日講官に充てられてをる。成玉蘊は字を行之と云ひ、その先は粵人で、明亡びて後今の河内の壽昌に移り住んだ。嗣德十八年會試中乙科に登第し、興安督學に進み、よく士子を導き、同慶二年光祿寺卿となり、三年國史館纂修に充てられ、次いで年五十九を以て卒してをる。

大南寔錄正編第二紀の方は、嗣德十四年五月二十五日に至り成を告げ、當時の史臣潘清簡、張國用、范有儀、黎亮拔の名に依り印刻を奏請し、嗣德十七年十一月二十九日潘清簡、潘輝泳、范徵、陳聯輝の名に依り印刷完了を奏してをる。二百二十卷五十四冊の大冊である。大南寔錄諸篇の中最も完備せるものである。

潘清簡は字を靖伯また淡如とも云ひ、梁溪又は梅川と號し、其の先は支那人であり、明末に南遷して平定省に來り、西山の亂に及んで永隆の永平

に移つてをる。少にして文名あり、明命七年進士

となり、刑部郎中、承天府府尹、禮部侍郎等を歴任し、大理寺卿兼辦刑部事務充機密院大臣に擢でられ、次いで廣南布政護理巡撫となつたが、事あつて左遷せられ、後戸部侍郎、兵部侍郎を經、紹治七年刑部尙書充機密院大臣に擢でられ、嗣徳元年吏部に改められ、後出でて交趾支那の統治に勉め、歸るや協辦大學士領兵部尙書となり、越史通鑑綱目を監修し、十五年フランスの交趾支那占領に際し講和全權大臣となり、その結果は朝廷の容認する所とならず、十六年フランスに正使として赴き交渉し、歸來戸部尙書となり、十八年には年六十九で上疏して休を請ふたが容るゝ所にならず、二十年フランスの再び交趾支那に事をかまふや、清簡往いて之と折衝してならず、遂に三省をフランスに委ねて自殺した。年七十一であり死後その職銜を剝奪され、同慶元年に至つて舊に復してを

る。

張國用は河靜石河の人、明命十年進士に擢でられ、嗣徳元年刑部尙書に進み、國史館總裁に充てられ、十五年海安の賊を討平し、十七年廣安の賊を討つて敗死した。その聞見を記した退食記聞録が世に行はれてをる。黎亮拔は字を仲彙と云ひ、父安宜祿の人で明命十五年卿薦を領し、南定督學に進み、嗣徳の初侍講を以て史館編修に充てられ、詔を奉じて遺書を求め、後禮部郎中に遷り、鴻臚寺卿を加へ、史館纂修となり、清化布政使を授けられ、治績あり、十九年戸部右參知となり、次いで禮吏二部に轉じ、後吏部尙書を權に掌つたが事を以て左遷せられ、侍講學士として官に卒した。潘輝泳は字を涵南と云ひ、その先は父安の人、後山西の安山に遷つてをる。明命中寔錄總裁になつた輝滉の子であり、歷朝憲章類誌の著者輝注は彼の従弟である。少にして家學を修め、明命九年

卿薦を領し、紹治中侍講學士を拜し、史館編修に充てられ、嗣徳六年には吏部左侍郎を以て清に使し、歸來禮部尙書に進み、育徳堂講肆兼國史館總裁に充てられ、二十三年事を以て左遷せられ、年を引いて致事し、年七十一を以て卒した。著に駟程隨筆集がある。

范徵は河靜香山の人、嗣徳四年試に應じ、累遷して南定布政使となり、召されて直學士に除し、史館纂修に充てられ、都察院左副都御史を兼ねたが、病を以て歸り、尋で卒してをる。陳聯輝は字を保光と云ひ、北寧嘉平の人、明命六年に年十八を以て薦に應じ、雋譽あり、嗣徳の初平定督學となり、鴻臚寺少卿に除せられ、史館纂修に充てられ、十七年光祿寺少卿を加へられ、故の如く史職を領し、尋で病んで卒した。

第三紀即ち紹治帝の寔録は嗣徳三十年十一月三日に陳踐誠、黎伯慎、范輝炳の名に依つて成を告

安南史研究上の二資料（松本）

げ、その印刻を奏請してをり、同三十二年七月四日に完成を告げてをる。凡て七十二卷からなり、十二冊に分れてをる。

陳踐誠の先は支那福建の人、清初承天の香茶に遷り、父伯亮は明命の初舉に應じ、新平府に知であつた。その子踐誠は小にして穎異、明命十九年進士に擢でられ、紹治中清化按察使に進み、嗣徳中工部侍郎になり、五經四傳大全の印刷を奏請し容れられ、十四年工部尙書、十七年にはフランス全權何巴理（Aubaret）來京に際して全權副使となり、また海安の戎務に従ひ、功あり、協辦大學士となり、國史館總裁に充てられ、交趾支那三省の事起るや欽差大臣として嘉定に赴き、フランスと商議し、成果を舉げ得なかつたが、君寵依然たるものあり、たゞ嗣徳帝薨去後の皇位繼承の問題に巻き込まれ、暗殺された。

黎伯慎は字を審光と云ひ、春山と號し、承天香

水の人、嗣徳元年試に當り、協辦大學士に進み、二十九年育徳堂師保となりしも間もなく犯蹕の罪を以て杖徒に問はれ、次いで病で卒した。年六十

一。
第四紀即ち嗣徳帝の寔録は成泰六年七月二十四日阮仲合、張光愼、段文會、斐殷年、黃有秤、阮瓊、鄭省潛の名に依り、成を奏し、成泰十一年七月二十九日に印刻が完成した。七十卷、二十八冊の大冊である。右の中阮瓊は香山車廊の人、嗣徳二十年登科し、成泰五年に光祿寺卿として禮部侍郎を領してをる。

第五紀即ち建福帝の寔録八卷(二冊)は成泰十二年十一月四日張光愼、阮述、黃有科、高春育、吳惠連に依り成を奏し、十四年七月二十八日に印行せられた。右の中高春育は又安東城盛慶の人、嗣徳二十九年登科、東北次贊理、興安巡撫、定寧總督、山興宣總督に歴任してをる。また吳惠連は石

河瓜牙の人、嗣徳二十六年登科し、成泰中廣義督學たり、また史館編修に改め充てられてをる。

第六紀即ち同慶帝の寔録十一卷(四冊)は維新三年五月十九日高春育、劉德稱、陳燦の名に依り成を奏し、四年九月八日に印刻が終つてをる。右の中陳燦は廣治登昌香科の人、嗣徳二十九年登科、成泰五年中御史となつてをる。

大南正編列傳初集の完成後、それ以後の列傳の編修が成泰七年八月に命せられ、明命初年より同慶三年以前の人物の傳記編纂が始められた。東京地方は安南政府の直接支配下にないので、阮仲合が直接同地に在つて廣治廣平以北の諸臣列傳編修の任に當り、一九〇二年に歿するやその草稿は殆ど完成に近く、その子阮惟燮に依つて史館に獻せられた。史館は専ら后妃皇子公主及び承天府以南の諸臣の列傳を作り、また阮仲合の遺稿を補ひ、維新三年九月十九日に成を告げ、印刻を奏請して

をる。その時の史臣は高春育、劉德稱、陳燦であり、編目は后妃傳、皇子傳、公主傳、諸臣傳、忠義傳、行儀傳、烈女傳、隱逸傳、高僧傳、逆臣傳の十目であり、四十六卷、十冊から成つてをる。

大南寔錄の終りの部分が吾人にとつて特に興味あるのは、第四紀の末より第五紀と第六紀にかけて嗣德帝歿後安南王統の慌しい廢立が委細に記述せられ、從來事件の核心を知らなかつた吾人に極めて確實な資料を供給して呉れることである。第四代の嗣德帝がその治世三十六年（一八八三）に崩御せられるや、その二日前に遺詔によつてその甥にして嗣德帝の第一養子なりし育徳が大統を繼ぐことになり、陳踐誠、阮文祥、尊宗説の三人が輔政大臣となつて之を助けることになつた。しかるに六月十六日愈々帝が他界せられると、嗣君の行狀に満足せざる阮文祥、尊宗説の二人は之を廢さんと密議し、遺詔を宣するに當つて帝が之を豫め

改滅したるを口實とし、遂に高壓手段に訴へ、嗣德帝の母なる慈裕太皇太后の懿旨を得て嗣德帝の同母弟郎國公を擁立した（六月二十日）。新帝は協和の年號をもつて踐祚したが、二人の權臣は帝が腹心の部下を集めて密に彼等を除去せんと謀るを懼れ、十月三十日に之を廢位して毒殺し、紹治帝の第二十六子堅國公洪儀の三子で嗣德帝の第三養子であつた膺登即ち建福帝が年十五歳で擁立せられた。然し帝は翌年四月病を發し、六月十日崩じ、その弟紹治帝第二十六子堅國公洪儀の五子膺蹙が十三歳で踐祚して咸宜帝となつた。此の帝も翌年五月尊室説の起したフランス勢力を排撃せんとする高壓手段クイデターに捲きこまれ、都を出奔し、廢位され、堅國公洪儀の長子にして嗣德帝の第二養子たる膺跋即ち同慶帝が八月重臣達によりフランス及び太皇太后、皇太后の同意を得て擁立せられた。

寔錄は嗣德帝の第四紀の末尾七十卷に「附廢帝」

として洪佚即ち第五代目協和帝の事を録し、建福帝の第五紀の卷五、六、七、八に「咸宣帝附」として第七代目なる此帝の事跡を記し、その治世年號をその即位した年に對しては干支を以て表してをる。

第八代目同慶帝は治世三年にして崩じ、育徳帝の皇子が之を嗣いで第九代目成泰帝となり（一八八九年）、帝は十九年の治世の後一九〇七年その皇子第十代目維新帝に位を譲られた。年八歳の新帝は一九一六年獨立運動を計つて宮廷を脱出し、事ならずして捕へられ、次に同慶帝の皇子が位を嗣いで第十一代目啓定帝となり、一九二五年その崩御にあたり皇子永瑞が即位して第十二代目保大帝となつた。これが現安南帝である。寔録の編纂は同慶帝以後依然繼續してをる筈で、予が順化を訪れた際、史館を案内して呉れた役人も國史館總裁の牌を帯びてゐた。然し最近の寔録は未だ外部に

流布されてゐないので、その内容を窺知することは出来ないが、恐らく維新帝などの記載は協和帝咸宣帝同様の閔位的取扱を受けてをることであらう。

寔録に關する以上の紹介はまことに簡單で、讀者には充分の満足が與へられなかつたと思ふが、詳細は後日に譲つて筆を止めることにする。なほ附録として寔録の目録を附載した。括弧内は筆者の補足である。^{三三}とにかく此貴重なる資料が數部我國に齎らされて今後本邦に於ても安南最近世史の研究の可能となつた事は吾人の衷心より悦びに堪へぬ所であり、關係盡力者の好意に重ねて厚く御禮する次第である。

(一) 本書に就て「民族學研究」一の三参照。

(二) 西曆との對象は大體の比定である。